



紀平真理子のオランダ通信

第15回

経営者が女性の Hollandhoeve 農場訪問記

プロフィール

1985年、愛知県名古屋市生まれ。南山大学外国語学部スペイン語学専攻卒業後、コンタクトレンズメーカーで国内・海外業務に携わる。夫の駐在帯同で2011年12月からオランダのアムステルダム市に在住。父の家庭菜園を見て農業に興味を持っていたこともあり、すべてにおいて実利的で交渉上手なオランダ人によるオランダ式農業に魅了されたという。

7月下旬、アムステルダムから車で40分、北ホランド州の「Wisk」という村にあるHollandhoeve農場を訪問した。酪農家の家庭で育ったJoke van（女性）は、郵便局勤めをし、20数年前にニュージーランドの親戚の家で6年間生活を営む。その後、「農業を発展させたい」「社会に貢献したい」との思いからオランダで酪農家になることを決意。いまではパートナーのJanさんとの家族経営で、44haの所有地と13haの借地の計57haで約100頭の乳牛を飼養し、年間およそ100万ℓを搾乳するまでになっている。オランダの年間搾乳量は1頭当たり8075ℓのため、平均より多いことがわかる。同農場では夏季の昼間は放牧、夜間と冬季は牛舎内でのフリーストール方式を採用している。

6年間の計画と構想の末、今年4月、新牛舎と大規模な自動搾乳機への設備投資を始めた。それだけではなく、飲用可能な地下水を再利用する仕組み、太陽光パネルでの自家発電と売電装置、牛ふんをデントコーンへの肥料として再利用するなど、持続可能や循環をテーマに設備投資が進められた。

新牛舎内の一部設備は未完成であるものの、自動搾乳機がすでに設置されており、屋内は明るく、清潔な

印象だった。そのなかで目が留まったのはLely社の搾乳ロボット、アストロノートだ（編集部注：日本ではコーンズ・エージーが輸入・販売している）。1948年創業の同社は、年商が5億6500万ユーロ（日本円で約780億円）に上るオランダの農業機械メーカーで、とくに酪農周辺技術を得意とする。同農場には管理ITシステムである「iNC Inherd」も導入されている。

牛はIDが埋め込まれたネックレスを身に付けており、それぞれの搾乳量、授乳日数、搾乳にかかった時間、生乳の品質がアプリ上で確認できる。何かトラブルが発生した場合でも、即座に「どの牛が」「いつから」「どのように」問題が起こったかを把握できるよう普段から情報を集めて、農場全体、牛1頭1頭をマネジメントすることが作業効率の向上とリスク管理上、大切だとJokeさんは話す。パソコンを操作するガラス張りの事務所からは常に牛舎全体が見渡せる構造になっていた。

飼料に関しては、牧草サイレージと濃厚飼料としてデントコーンや大豆、ジャガイモ、ニンジン、ビールポステル——ビール醸造所で穀物から麦汁を抽出した際の残りがす。プロテインを多く含んでいる——を用いているそうだ。

CSAR——オランダ穀物生産者団体——は、穀物用トウモロコシの品種別リサーチを行ない、推奨品種とその特徴をリストアップして毎年更新している。それによると、「Wisk」を含むオランダ西部、北部地域では、サイレージ用トウモロコシに「Shoxx」や「Atrium」といった極早生か早生品種の選択が望ましいそうだ。余談だが、このリストには子実トウモロコシやイアコーンの推奨品種として「Coryphee」や「ES Marco」などの名があった。これらの品種の収穫可分性——穂の落下や硬度不足がないもの——は80〜85%で、収穫時の水分量は25〜30%、収穫後は16%まで乾燥させる必要があると示されていた。ちなみに、評価した全28品種の平均収量は子実トウモロコシ（16%の水分量）が13t/ha、イアコーン（35%の水分量）は16・8t/haだった。

今回の訪問で最も印象的だったのは、女性であるJokeさんが積極的に経営にかかわっていたことだ。農業以外の職業経験や海外での生活経験から幅広い知識と広い見解を持ち、「どのように農場を大きくしていくか」「社会に貢献する方法は何か」をしっかりと考えながら日々、生産者としての業務も勤め上げる魅力的で素敵な女性だった。